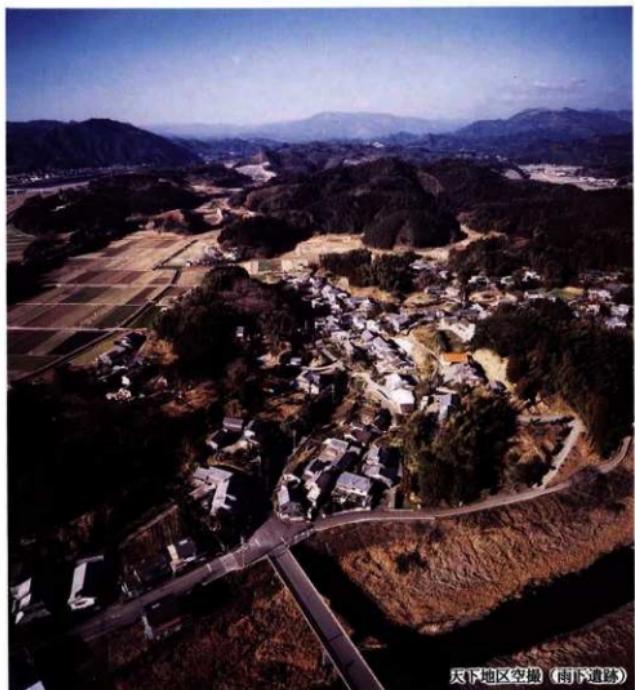


平成8年度 市内遺跡発掘調査事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書

IMAINO	今井野遺跡群(第3次)	NOBEOKAJO	延岡城第12次(西ノ丸東虎口)
UENOBO	上ノ坊遺跡(第3次)	NOBEOKAJO	延岡城第11次(本丸長屋跡)
HIRANO	平野遺跡(第2次)	AMORI	雨下遺跡
FUNAIWA	船岩遺跡	SENKŌJI	千光寺山門
HINOBORI	肥登遺跡		



1997・3

延岡市教育委員会

序 文

延岡市は宮崎県の北部に位置し、県内でも最大を誇る工業都市であります。

延岡市は、都市像（将来像）を「共に輝き創る交流拠点都市 のべおか」とし「第4次長期総合計画基本構想」において、“交流ネットワーク都市”“明日を創る産業拠点都市”“潤いと賑わいに満ちた水とみどりの生活都市”“人と文化が輝く歴史都市”“あたたかく共に支える健康都市”“清潔で安全な環境都市”を6つの基本目標とし、今後の事業の展開を図っているところであります。また「宮崎県北部地方拠点都市地域」の指定、「一般国道10号線延岡道路」の都市計画決定、さらには、市民の永年の夢であった4年制大学の建設もはじまり、大規模な公共事業が展開されています。それに伴い、民間等の開発事業も増加しています。このような状況に対応するため、市教育委員会では開発事業等の計画に際して、埋蔵文化財の確認調査等を実施しているところであります、本書はその報告書であります。

本書が埋蔵文化財への理解を深める一助になることを願うとともに、研究資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり県文化課をはじめ、地権者の方々などのご協力を得ました。記して感謝いたします。

平成9年3月31日

延岡市教育委員会

教育長 牧 野 哲 久

例 言

1. 本書は、延岡市教育委員会が国・県補助を受けて、平成8年度に実施した市内遺跡発掘調査報告書である。
2. 本年度は、今井野遺跡群（第3次）、上ノ坊遺跡（第3次）、延岡城第12次（西ノ丸東虎口）、平野遺跡（第2次）、船岩遺跡、延岡城第11次（本丸長屋跡）、肥登遺跡、南下遺跡、赤木遺跡（第3次）、飯島遺跡（第2次）の発掘調査を実施した。
3. 千光寺山門の調査については、宮崎県立向工業高等学校建築科に依頼し、墨書き等の解説については、永田操氏（宮崎県文化財保護指導委員）にご協力いただいた。
4. 本書に使用した構造・遺物の実測、トレース、図面作製については、山田 駿、尾方義一、高浦 伸、甲斐佳代、麻石サヨ子、高橋京子、山本敬子があたった。
5. 現場での写真撮影は各担当者があたり、遺物の写真撮影は尾方、高浦があつた。
6. 方位は北を向いている。また本書に使用したレベルは、すべて海拔高である。
7. 出土遺物は内藤記念館で保管しており、今後展示公開の予定である。

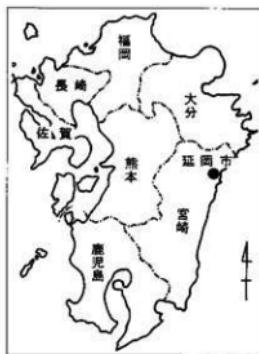


Fig 1. 延岡市位置図

本 文 目 次

第Ⅰ章はじめに

1.はじめに	1	2.調査の記録	3
第Ⅱ章 調査の記録					
1.今井野遺跡群（第3次）	3	2.上ノ坊遺跡（第3次）	4
3.平野遺跡（第2次）	5	4.船岩遺跡	6
5.肥登遺跡	7	6.延岡城第12次（西ノ丸東虎口）	8
7.延岡城第11次（本丸長屋跡）	12	8.南下遺跡	16
9.千光寺山門	18			

付 錄

1.千光寺山門調査

挿 図 目 次

Fig 1. 延岡市位置図	2
Fig 3. 今井野遺跡群（第3次）位置図	3
Fig 5. 上ノ坊遺跡（第3次）位置図	4
Fig 7. 平野遺跡（第2次）位置図	5
Fig 9. 船岩遺跡位置図	6
Fig 11. 肥登遺跡位置図	7
Fig 13. 延岡城第12次（西ノ丸東虎口）位置図	8
Fig 15. 延岡城第12次（西ノ丸東虎口）第1トレンチ出土遺構平面図	9
Fig 17. 延岡城第12次（西ノ丸東虎口）第2トレンチ出土遺物実測図	11
Fig 19. 延岡城第11次（本丸長屋跡）石礎平面図	13
Fig 21. 延岡城第11次（本丸長屋跡）出土遺物実測図	15
Fig 23. 南下遺跡出土遺物実測図	17
Fig 25. 千光寺山門位置図	18
Fig 27. 千光寺山門瓦実測図	20
Fig 2. 平成8年度発掘調査遺跡分布図	2
Fig 4. 今井野遺跡群（第3次）調査区配図図	3
Fig 6. 上ノ坊遺跡（第3次）調査区配図図	4
Fig 8. 平野遺跡（第2次）調査区配図図	5
Fig 10. 船岩遺跡調査区配図図	6
Fig 12. 肥登遺跡調査区配図図	7
Fig 14. 延岡城第12次（西ノ丸東虎口）調査区配図図	8
Fig 16. 延岡城第12次（西ノ丸東虎口）第2トレンチ実測図	10
Fig 18. 延岡城第11次（本丸長屋跡）位置図	12
Fig 20. 延岡城第11次（本丸長屋跡）調査区配図図	13
Fig 22. 南下遺跡位置図	16
Fig 24. 南下遺跡調査区配図図および5号埴輪実測図	17
Fig 26. 千光寺山門瓦実測図	19

表 目 次

第1表 平成8年度市内遺跡発掘調査一覧表

第2表 報告書抄録

写 真 図 版 目 次

今井野遺跡群（第3次）調査風景	P L. 1	上ノ坊遺跡（第3次）調査風景	P L. 2
平野遺跡（第2次）調査風景	P L. 3	船岩遺跡A地区丘陵調査風景	P L. 4
肥登遺跡調査風景	P L. 5	延岡城第12次（西ノ丸東虎口）第2トレンチ排水溝検出状況	P L. 6
延岡城第11次（本丸長屋跡）調査区全貌	P L. 7	延岡城第11次（本丸長屋跡）石礎検出状況	P L. 8
延岡城第11次（本丸長屋跡）出土遺物	P L. 9	南下遺跡調査前風景	P L. 10
南下遺跡調査風景	P L. 11	南下遺跡出土遺物	P L. 12
千光寺山門	P L. 13	千光寺山門改築後（南側から）	P L. 14
千光寺山門改築後（北側から）	P L. 15	千光寺山門改築後（西側から）	P L. 16
千光寺山門検出瓦	P L. 17			

第Ⅰ章 はじめに

1. はじめに

延岡市は、宮崎県の北部に位置し、東経131度32分45秒～131度50分20秒、北緯32度43分32秒～32度29分11秒の間にあり、面積は238.77平方キロメートルである。本市は、五ヶ瀬川の豊富な水源を基とする日本空素肥料（現在の旭成工業株式会社）等により発展する、県下最大の工業都市である。また、延岡藩主内藤家伝来の能面展、来年度の薪能開催等により、文化的都市というイメージも高まっている。

現在、延岡市では「リフレッシュのべおか」＝今以上に個性的で豊かな延岡の再生と創造を合言葉に、都市の活性化を推進させることを目的とした事業を展開している。都市基盤整備を重点的に進め、さらに「宮崎県北部地方拠点都市地域」の指定や「一般国道10号延岡道路」の都市計画決定を受け、それらの関連事業が動きだしている。「西部大規模複合産業団地」学術・文化ゾーンでの大学建設着工はまさにその第一步である。こういった状況の中で、公共・民間を問わず開発事業が増加し、それに伴い埋蔵文化財の調査数も増大している。同時に開発事業と文化財保護との関係が問題になりつつある。

今年度の調査は公共事業に伴う調査が主であり、これら開発事業と埋蔵文化財保護との調整資料を得るために確認調査を実施した。

本年度の市内遺跡発掘調査は下記の11箇所で実施した。また赤木遺跡（第3次）、飯島遺跡（第2次）は、年度末調査であったことから割愛させていただき次年度報告とする。

遺跡名	所在地（延岡市）	調査原因	調査面積	調査期間
今井野遺跡群（第3次）	天下町字今井野	市道改良工事	28m ²	平成8年7月1日～9日
上ノ坊遺跡（第3次）	富美山町字上ノ坊	民間宅地造成	48m ²	平成8年7月15日～23日
延岡城第12次（西ノ丸東虎口）	天神小路字本小路	道路・駐輪場整備	34m ²	平成8年10月9日～30日
平野遺跡（第2次）	野田町字平野	民間宅地造成	58m ²	平成8年12月24日～平成9年1月9日
船岩遺跡	天下町字船岩	市道改良工事	412m ²	平成8年11月1日、11月5日、12月2日 12月27日、平成9年1月9日～14日
延岡城第11次（本丸長原跡）	東木小路字本小路	都市公園整備（トイレ新築）	110m ²	平成9年1月10日～2月5日
肥登遺跡	野地町字肥登	民間宅地造成	58m ²	平成9年1月16日～29日
雨下遺跡	天下町字雨下	市道改良工事に伴う宅地造成	39m ²	平成9年2月5日～2月14日 2月25日～2月27日
赤木遺跡（第3次）	舞野町字赤木	携帯電話無線基地局設置	41m ²	平成9年3月14日～18日
飯島遺跡（第2次）	野田町字飯島	区画整理	65m ²	平成9年3月17日～24日
千光寺山門	祝子町字池ノ上	山門改修	8m ²	平成9年1月23日

第1表 平成8年度 市内遺跡発掘調査一覧表

2. 調査の組織

調査主体	延岡市教育委員会
教育長	牧野 哲久
文化課長	大石 孟
文化係長	酒井 修平
庶務担当	吉永 純子
調査担当	山田 聰
文化課副主任	尾方 農一
文化課主事	高浦 哲
文化課主事	高浦 哲
発掘作業員	安藤登美子、伊藤国利、沖米田恭之、小野愛子、甲斐カツキ、 甲斐 正、久保利男、酒井 嶽、酒井清子、酒井キミ子、酒井孝房、 酒井初枝、酒井義穂、佐藤誠志郎、敷石智也、野田智宣、林田裕子、 町田圭佑、山崎俊輔、柳田徳子、柳田優宏、柳田ヨシ子、渡木 豊 甲斐佳代、敷石サヨ子、高橋京子、山本敬子
資料整理	甲斐佳代、敷石サヨ子、高橋京子、山本敬子

発掘調査の事前協議等において、市上木課、同社会教育課、同街路公園課、同区画整理課の方々に御協力をいただいた。また土地所有者の佐竹産業株式会社、有限会社裕真産業、有限会社三晃建設、後藤正行氏、株式会社デジタルツーカー九州、千光寺住職柳田次雄氏などの方々には、調査の過程において便宜をはかっていただいた。千光寺山門調査にあたっては、宮崎県立日向工業高等学校建築科の先生方をはじめ生徒のみなさんに、調査へのご協力をいただいた。記して感謝します。



- 1. 今井野遺跡群(第3次)
- 2. 上ノ坊遺跡(第2次)
- 3. 半野遺跡(第2次)
- 4. 船岩遺跡
- 5. 肥登遺跡
- 6. 延岡城第12次(西ノ丸東虎口)
- 7. 延岡城第11次(本丸長屋附)
- 8. 雨下遺跡
- 9. 千光寺山門
- 10. 赤木遺跡(第3次)
- 11. 斎島遺跡(第2次)

Fig 2 平成8年度 発掘調査遺跡分布図 (1/50,000)

第Ⅱ章 調査の記録

1. 今井野遺跡群（第3次）

所在地 延岡市天下町1156-1外
調査原因 市道改良工事
調査期間 960701~970709

調査面積 2.8 m²
担当者 尾方・高浦
処置 調査後破壊

(1)位置と環境

当遺跡は、五ヶ瀬川分岐地より北に約600mの地点に位置する。ここは、標高約100mを頂上とする丘陵が、南に派生した斜面地にあたり、標高は約20~30mを測る。

周辺地には平成元年度調査した今井野遺跡第1次 平成5年度調査の今井野遺跡第2次が所在しており、旧石器～弥生時代の遺構、遺物の存在が確認されている。

また、当遺跡より北西約900mには、南方古墳群 第11~13号が所在しており、調査区周辺は「遺跡の宝庫」となっている。



Fig.3 今井野遺跡群(第3次)位置図 (1/15,000)

(2)調査の概要

発掘調査は土層観察と遺構検出を目的とし、トレチ調査法による確認調査を実施した。開発予定地丘陵に7箇所のトレンチを設定し調査を行った。

開墾等の掘削により、埋土状況には差はあるが、約0.5~1.2mで地山と思われる層が検出されている。

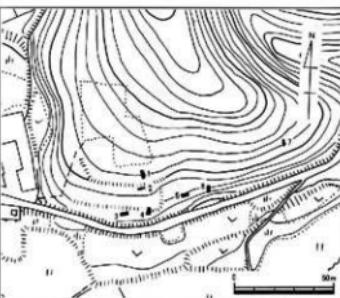


Fig.4 今井野遺跡群(第3次)調査区配置図 (1/2,500)

(3)検出遺構

検出されていない。

T 1、5、6、7において、砂礫層が検出された。これは、南に約700m離れた五ヶ瀬川の堆積物と考えられる。これにより、五ヶ瀬川の流路変遷を知る資料が得られた。

(4)出土遺物

遺物は出土していない。

(5)まとめ

今回の調査では、遺構、遺物は検出されなかった。しかし、付近には今井野遺跡群（第1次、第2次）、国指定史跡南方古墳群第11~13号墳等の遺跡が所在しているため、今後の周辺地の開発事業には充分な注意が必要と思われる。



PL.1 今井野遺跡群(第3次)調査風景

2. 上ノ坊遺跡（第3次）

所在地 延岡市富美山町83-810
調査原因 民間宅地造成
調査期間 960715～960723

調査面積 48 m²
担当者 尾方・高浦
処置 調査後破壊

(1)位置と環境

当遺跡は、市の中心部やや北に所在する。市の西より大きく派生する丘陵部の東縁にあたり、眼下には五ヶ瀬川、祝子川に挟まれた平野部が広がり、その先に日向灘が一望できる。丘陵は約62mの最高部（A地区）から東に延びる舌状丘陵（B地区）と北と西（C地区）にひろがる丘陵で構成されている。

平成7年度にA地区（第1次）、B地区（第2次）の調査を行っている。A地区の丘陵頂上部からは、土壙墓が1基検出され、短剣1点が出土している。B地区からは、直径約20mの円墳1基が検出され、長さ約3mの木棺を主体部に持ち、短甲1、鉄剣2、短剣1、鐵鎌1、鋤先1、鐵鎌40点等の副葬品が出土している。今回はC地区の確認調査を行った。

(2)調査の概要

発掘調査は土層観察と遺構検出を目的とし、トレソチ調査法による確認調査を実施した。開発予定地丘陵に7箇所のトレソチを設定し調査を行った。

約10～20cmで地山と思われる層が検出されている。

(3)検出遺構

検出されていない。調査地の基本層序は以下のとおりである。

第1層 表土

第2層 乳白色粘質岩土（地山）

(4)出土遺物

遺物は出土していない。

(5)まとめ

今回の調査では、遺構、遺物は検出されなかった。しかし、当丘陵は第2次調査で延岡を代表する古墳が検出されているとともに、周辺の丘陵にも古墳が点在している。今後の周辺地の開発事業には充分な注意が必要である。



Fig.5 上ノ坊遺跡（第3次）位置図 (1/15,000)

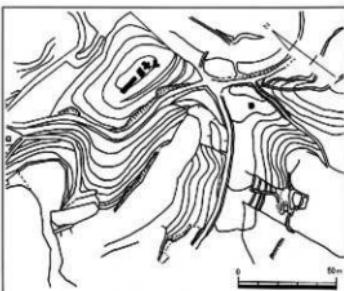


Fig.6 上ノ坊遺跡（第3次）調査区配置図 (1/2,500)



PL.2 上ノ坊遺跡（第3次）調査風景

3. 平野遺跡（第2次）

所在地 延岡市野田町4199-1外
調査原因 民間宅地造成
調査期間 961224~970109

調査面積 58m²
担当者 尾方・高浦
処置 調査後破壊

(1)位置と環境

当遺跡は、平成6年度に調査を行った平野遺跡の同一丘陵上で、南に面した部分にある。西階城址から北東に約600mで、以前は連続した丘陵だったことが伺える。前回の調査では遺物・遺構等は検出されなかったが、立地的な条件により前回よりも可能性が高いものと考えられた。

(2)調査の概要

発掘調査は土層観察と遺構検出を目的とし、トレチ調査法による確認調査を実施した。開発予定地丘陵に12箇所のトレチを設定し調査を行った。

約0.5~1mで地山と思われる層が検出されている。

(3)検出遺構

検出されていない。調査地の基本層序は以下のとおりである。

- 第1層 表土
- 第2層 淡黄褐色土（粒子が細かい）
- 第3層 乳白色粘質岩土
- 第4層 淡黄茶褐色弱粘質土（5層漸移層）
- 第5層 淡黄白色粘質土（長石等が多く混じる）

阿蘇の噴出物と思われる。

第3層、第5層は地山と思われる。第3層は東側に張り出した丘陵部（T 1~4、G 1~3）で、第5層は西側丘陵（T 5~9）で検出されている。

(4)出土遺物

遺物は出土していない。

(5)まとめ

今回の調査では、遺構、遺物は検出されなかった。しかし、付近には西階城址をはじめ、国指定史跡南方古墳群の第33号古墳等の遺跡が所在しているため、今後の周辺地の開発事業には充分な注意が必要と思われる。



Fig.7 平野遺跡（第2次）位置図 (1/15,000)

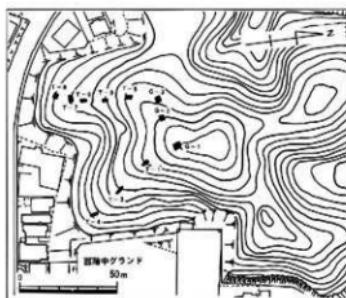


Fig.8 平野遺跡（第2次）調査区配置図 (1/2,500)



PL.3 平野遺跡（第2次）調査風景

4. 船岩遺跡

所在地 延岡市天下町1136外
調査原因 市道改良工事
調査期間 961101、961105、961202、961227
970109～970114

調査面積 412 m²
担当者 山田、高浦
処置 調査後破壊

(1)位置と環境

当遺跡は、五ヶ瀬川分岐地より北に450mに位置する。ここは、標高約30mを測り、眼下には天下地区の水田地帯が広がっている。調査地丘陵は、もとは一つの丘陵であったが、現在では頂上部を削平され二つの丘陵となっている。

調査地から谷を挟んだ南側の丘陵には、古墳時代の横穴墓群（鬼黒遺跡）が所在している。

当遺跡丘陵は、詳細分布調査によって「周知の埋蔵文化財包蔵地」として取り扱われている。（旧石器・縄文）



Fig.9 船岩遺跡位置図 (1/15,000)

(2)調査の概要

発掘調査は鬼黒遺跡の丘陵に隣接していることから、横穴墓の検出と土層の観察を目的に調査を行った。A地区丘陵上は、トレンチ調査法を採用し、斜面地は重機による表土剥ぎを行い、広範囲に調査した。また、B地区丘陵は尾根筋および斜面地を9本のトレンチにて調査を行った。

(3)検出遺構

検出されなかった。A、B丘陵の基本層序は以下のとおりである。

- 第1層 表土
- 第2層 黄褐色粘質土
- 第3層 白色粘質土（やや青味がかる）（地山）

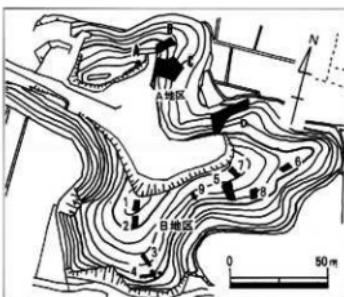


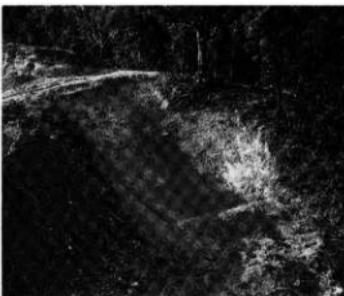
Fig.10 船岩遺跡調査区配置図 (1/2,500)

(4)出土遺物

遺物は検出されていない。

(5)まとめ

今回の調査では、遺構、遺物は検出されなかった。しかし、南に15mと非常に隣接した丘陵には、横穴墓群が所在しているため、今後の周辺地の開発事業には充分な注意が必要と思われる。



PL.4 船岩遺跡A地区丘陵調査風景

5. 肥登遺跡

所在地 延岡市野地町3丁目3724番地外
調査原因 民間宅地造成
調査期間 970116~970129

調査面積 5.8 m²
担当者 山田、高浦
処置 調査後破壊

(1)位置と環境

当遺跡は、五ヶ瀬川と大瀬川に挟まれた標高20mの丘陵に位置する。ここは、「周知の埋蔵文化財包蔵地」(古墳)にあたる。丘陵下低地は以前水田が営まれていたという。

(2)調査の概要

発掘調査は丘陵部が土層観察と遺構検出、低地では水田址の検出を目的とし、いずれもトレント調査法により確認調査を実施した。丘陵部は開墾等によりかなりの削平を受けていた。丘陵上に8本のトレントを設定し調査を行ったが、遺構、遺物の検出はできなかった。低地に設定した2本のトレントより泥炭層が検出された。水田基盤層検出のため精査したが、確認できなかった。

また、丘陵頂上部は近世～現代の墓域となっていた。墓碑銘の調査を行ったがほとんどが周辺から寄せられたもので、詳細については不明である。年号の分かれる墓石で最古の年号は明暦元年(1655年)であった。

(3)検出遺構

トレント9、10より泥炭層を検出したが、水田基盤層の検出はできなかった。

近世～現代墓約100基を確認したが、ほとんどが寄せられたものである。墓碑銘は明暦元年を最古とし、寛文、元禄、宝永、亨保、と続き、最も新しい年号は昭和であった。

(4)出土遺物

トレント2(削平部)より、キセル1、陶磁器片3を検出した。表採で陶磁器片5を採取できた。

(5)まとめ

当遺跡周辺から、古墳の存在が確認されていることから、それらに関係する遺構の存在を予想していた。しかし、予定地丘陵はかなりの削平を受けており、確認するに至らなかった。低地に営まれていたという水田についても確認できず、湿田であった可能性が高い。



Fig.11 肥登遺跡位置図 (1/15,000)

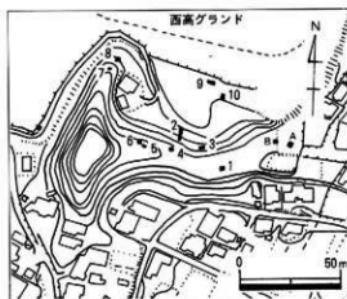


Fig.12 肥登遺跡調査区配置図 (1/2,500)



PL.5 肥登遺跡調査風景

6. 延岡城第12次（西ノ丸東虎口）

所在地	延岡市天神小路255-2	調査面積	3.4 m ²
調査原因	道路・駐輪場整備	担当者	山田
調査期間	961009～961030	位置	埋土保存

(1)位置と環境

延岡城は、市街地のほぼ中央部に位置し、東流する五ヶ瀬川及び大瀬川を天然の外堀として、その中洲にある自然丘陵に、天守台、本丸、二ノ丸、三ノ丸がある本城と西ノ丸の2郭で構成された県内屈指の近世城郭である。今回の調査地点は、西ノ丸への玄関口であった東虎口にあたる。絵図史料によると、東側の隣接には馬屋が記載され、発掘調査によってその一部、堀跡、掘立柱建物跡などが確認されている。また、カルチャープラザのべおか第4駐車場（旧テニスコート）付近には、小山や社が記載され、現況との相違がみられる。このような事例は東虎口の構造にもみられる。まず、道路から北側に入ると西側（左手）に門がある。門を通ると南（左手）に

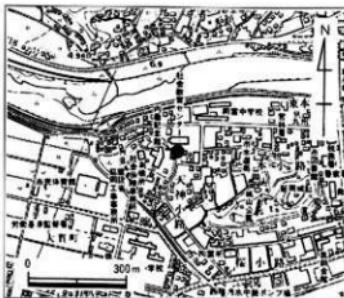


Fig.13 延岡城第12次（西ノ丸東虎口）位置図
(1/15,000)

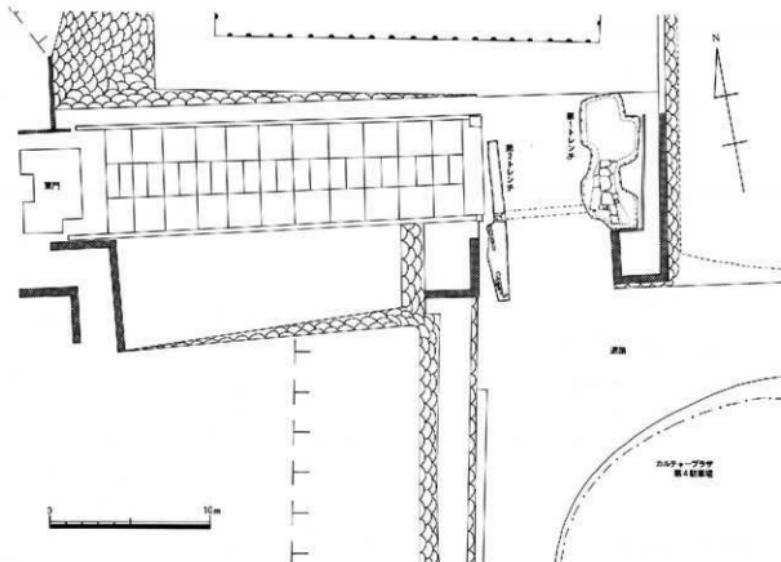


Fig.14 延岡城第12次（西ノ丸東虎口）調査区配置図 (1/300)

階段があり、段上にある門を通って右手の西ノ丸御殿に続いている。現在は、道路より直接西側（左手）に階段が設置され西ノ丸に登る構造になっている。これは、古写真から明治25年に内藤家当主が東京より帰郷した際、新たな御殿造営に伴う整備で変更されたと考えられている。

(2)調査の概要

工事は、現在の道路面を若干削平する予定であることから、道路面に第2トレントを設定した。また、調査開始の段階で、駐輪場予定地の一部掘削が行われていたため、その地点に第1トレントを設定した。第1トレントでは、やや大きな石垣列が確認された。その一部は掘削によって破壊を受けていたが、直交するように排水溝も検出された。この排水溝は、延岡城北大手門発掘調査（平成3・4年度実施）で確認されたものと全く構造が同じであった。また、石垣は東側に傾き、絵図史料によるとこの上に建物が存在しているが、小規模調査のため確認されていない。第2トレントでは、第1トレントから検出され



PL.6 延岡城第12次（西ノ丸東虎口）
第2トレント排水溝検出状況

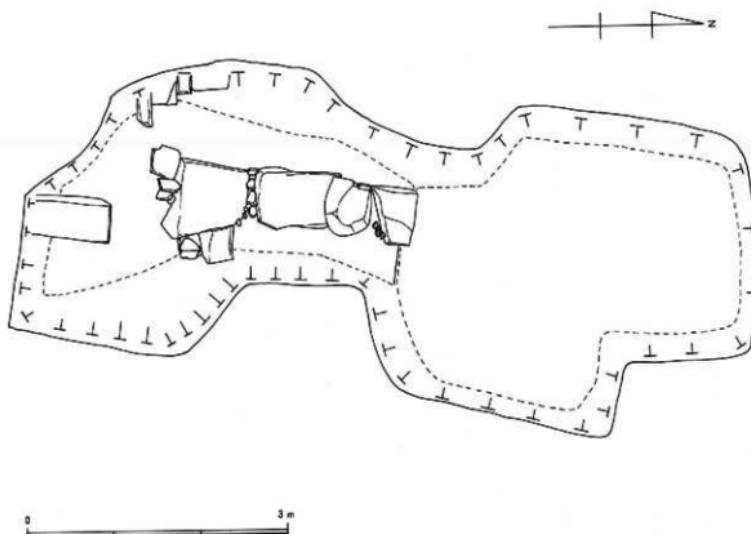


Fig.15 延岡城第12次（西ノ丸東虎口）第1トレント出土遺構平面図（1/60）

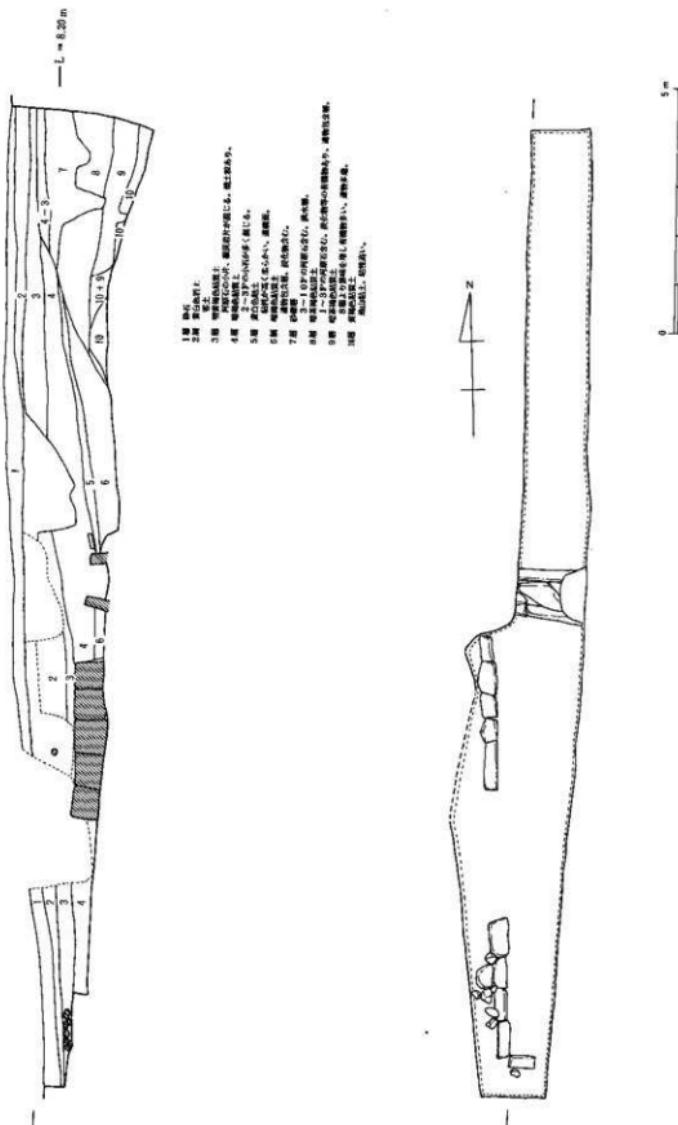


Fig.16 延岡城第12次（西ノ丸東虎口）第2トレンチ実測図（1／100）

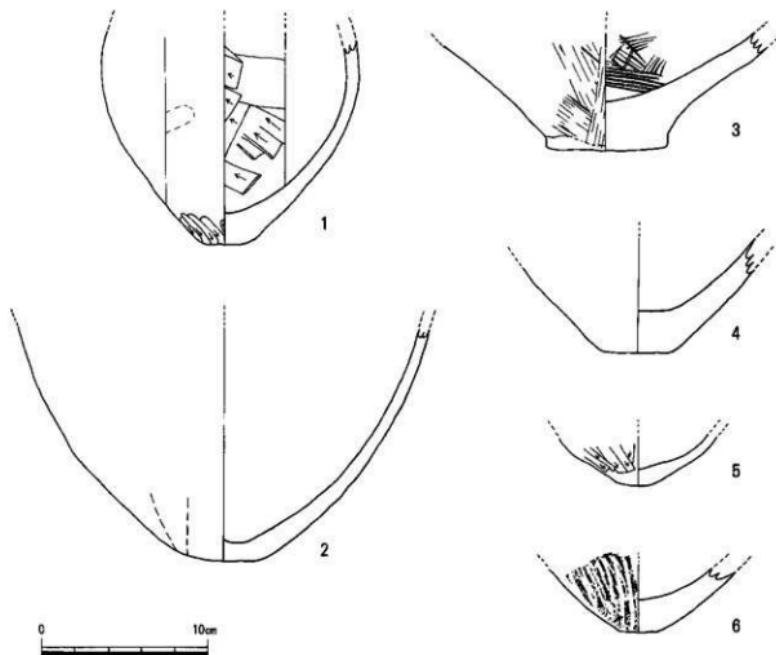


Fig.17 延岡城第12次（西ノ丸東虎口）第2トレンチ出土遺物実測図（1/3）

た排水溝跡の延長線上から新たに確認された。ここでは、排水溝の中に落ち込む格好で蓋石とみられる不整形の石も出土し、暗きよとして利用されていた可能性も考えられる。また、当時の道路面の縁石とみられる石列が確認された。さらに、江戸時代の遺構面の直下からは、弥生時代後期後半～終末期にかけての遺物包含層が確認され、トレンチ北側から大量の土器片が出土した。

(3)検出遺構

第1トレンチからは、南北方向に延びる石垣を確認し、石垣の西側に延びる排水溝跡の一部を検出した。第2トレンチからは、虎口通路の西側の縁石列及び第1トレンチから延びる排水溝跡を確認した。

(4)出土遺物

第2トレンチの深さ50～130cmにかけて弥生時代後期後半～終末期の遺物包含層を確認し、壺形土器、壺形土器、鉢形土器が出土した。

(5)まとめ

今回の調査では、延岡城西ノ丸における旧虎口の構造について、一部であるが絵図史料を裏付けるように確認することができた。このことは、現存する絵図史料の信頼性が高いことを示しており、今後進められる延岡城の構造解明への参考資料としての活用が期待される。

7. 延岡城第11次（本丸長屋跡）

所在地 延岡市本小路170外

調査原因 都市公園整備（トイレ新築）

調査期間 970110～970205

調査面積 110 m²

担当者 尾方・高浦

処置 本調査

(1)位置と環境

当遺跡は、県内を代表する近世城郭である延岡城の一角にある。延岡城は市の中心部に位置し、五ヶ瀬・大瀬川に挟まれた標高約53.4mの独立丘陵という天然の要害を選んで築城されている。築城は当時の藩主高橋元種によって、1601年から3年かけて行われている。

調査地点は、三ノ丸から本丸に登る、吹上坂を登り切った地点で、本丸への北側からの進入路にあたる。「有馬家中延岡城下屋敷並絵図」(1670～1683年頃)には建物が描かれている。また、その他の絵図資料、文献資料の比較から「日州延岡署記」(1719年写)に記載されている『長屋一二間半ニ拾五間』という記述がこれにあたると考えられた。

(2)調査の概要

発掘調査は遺構検出に主眼をおき実施した。15箇所のトレチを設定し、遺物等の集中部においては、それを広げ調査を行った。調査地の基本層序は以下のとおりである。

- 第1層 表土(15～20cm: 瓦等を含む)
- 第2層 淡橙色砂岩層(20～25cm: 4～5cmの砂岩層)
- 第3層 砂岩粒層(15～20cm: 白色粘質岩土混じり。砂岩は殆ど粒状。遺構面。)
- 第4層 褐色土層(約10cm: 砂岩粒混じり。)
- 第5層 暗橙色砂岩層(約15cm: 2cm程度の砂岩粒混じり。)
- 第6層 暗褐色粘質土層(20～25cm: 炭化物が多量に混じる。二次焼成をうけた瓦も出土。)
- 第7層 暗乳白色砂岩層(10cm前後)
- 第8層 淡褐色土層(砂岩粒、乳白色岩土粒等を含む。炭化物を少量含む。)
- 第9層 黄白色砂岩層
- 第10層 褐色土層(炭化物、焼土粒を多量に含む。砂岩粒、丸石を少量含む。)

以上のように薄い層が幾層にも重なっており、調査地が埋土による造成地であることが判断された。現存する石垣の高さ等から判断し、最終的な遺構面を第2層上面とし、調査を行った。

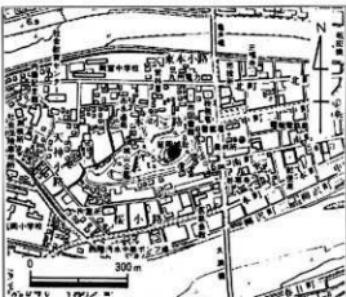


Fig.18 延岡城第11次（本丸長屋跡）位置図
(1/15,000)



PL.7 延岡城第11次（本丸長屋跡）調査区全景



PL.8 延岡城第11次（本丸長屋跡）石樋検出状況

後世の搅乱（ゴミ穴や上水・下水等）が多く、特に調査区南側は、現在、使用されているトイレ等の建設によって、遺構は検出されなかった。北側については柱穴、瓦等の遺構・遺物が検出されているが、長屋の存在を裏付けるまでには到らなかった。

(3)検出遺構

- ①柱穴 調査区のほぼ中央付近から25個の柱穴が検出されている。比較的に遺物が集中している部分であったが、建物跡は復元できなかった。遺物は4か所から瓦片が出士しているのみである。
- ②石樋 調査区西側の石垣から張り出した排水施設で、一部は調査以前より露出していた。阿蘇溶結凝灰岩（灰石）を削り抜いて作られており、長さ約220cm、幅約41.5cm、高さ33cm、溝の深さ13.5cmであった。周辺から関連する遺構等は検出されなかつたが、長屋の位置を検討する上で、一つの材料になるであろう。

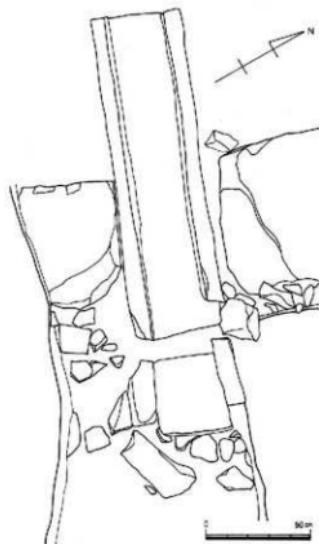


Fig.19 延岡城第11次(本丸長屋跡)石樋平面図
(1/20)

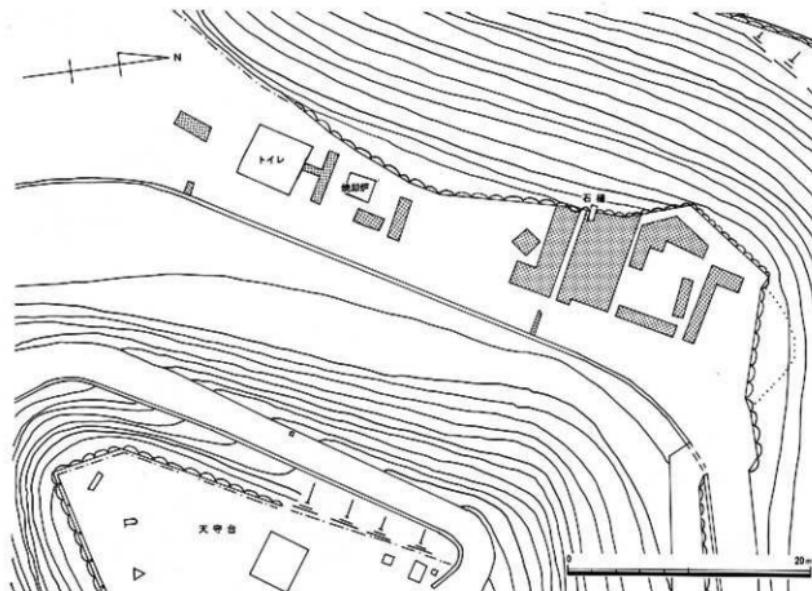


Fig.20 延岡城第11次(本丸長屋跡)調査区配置図 (1/400)

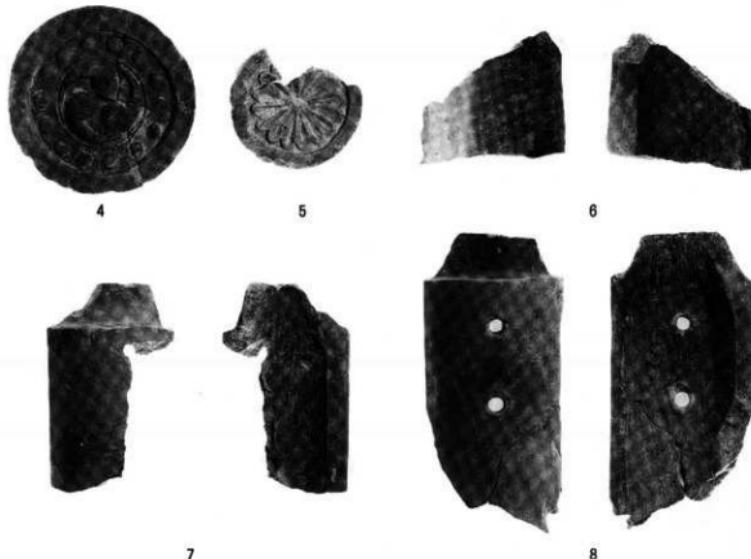
(4)出土遺物

瓦片約520点、陶磁器片140点、土師質土器片約32点が出土している。

- 1は、土師質土器の小皿で口径14㌢、器高2.6㌢、底径7.8㌢である。ロクロ整形、底部に左回転の糸切り痕を有する。調整は内外面ともに回転ナデ。内面は磨いている。
- 2は、土師質土器の小皿で口径14㌢、器高2.6㌢、底径7.8㌢である。手捏ね整形で、調整は内外面ともナデである。
- 3は、三巴文軒丸瓦。瓦当径は16.2㌢。左巻きで圓線を巡らせており。巴の頭部は大きく、尾は長く延びるが、互いに接しない。珠文数は16個で、径は約1.3㌢である。瓦当面はナデ調整。接合面はナデによる接合である。
- 4は、三巴文軒丸瓦。瓦当径は15.9㌢。左巻きで圓線を巡らせており。巴の頭部は大きく、尾は長く延びるが、互いに接しない。珠文数は14個で、径は約1.3㌢である。瓦当面はナデ調整で、裏側は横方向のナデである。
- 5は、菊花文軒丸瓦。弁は復元で16弁、瓦当径は10.8㌢である。磨耗のため調整は不明である。
- 6は、丸瓦。胴部外面の調整はナデ、上位は縦方向のヘラナデである。内面は糸切り痕が残る。
- 7は、丸瓦。胴部外面の調整は縦方向のヘラナデ、上位はナデである。玉縁外面はナデである。内面は鉄線引きである。
- 8は、丸瓦。玉縁部にやや歪みがある。胴部外面の調整はナデ、玉縁外面は指による丁寧な横方向のナデである。内面は鉄線引き、全体的に細かい布の痕跡が残る。

(5)まとめ

今回の調査地点は、遺構面が浅く、昭和以降に掘られたと思われるゴミ溜め等の攪乱が多く、遺構の残存状況は非常に悪かった。柱穴等の遺構を検出したが、建物跡は復元できず長屋の位置を確認することは出来なかった。また、調査地は公園管理用の道路で自動車が多く通り、その重みによって遺物がかなり細かい破片となってしまっていた。今後の整備における一つの問題点である。



PL.9 延岡城第11次（本丸長屋跡）出土遺物

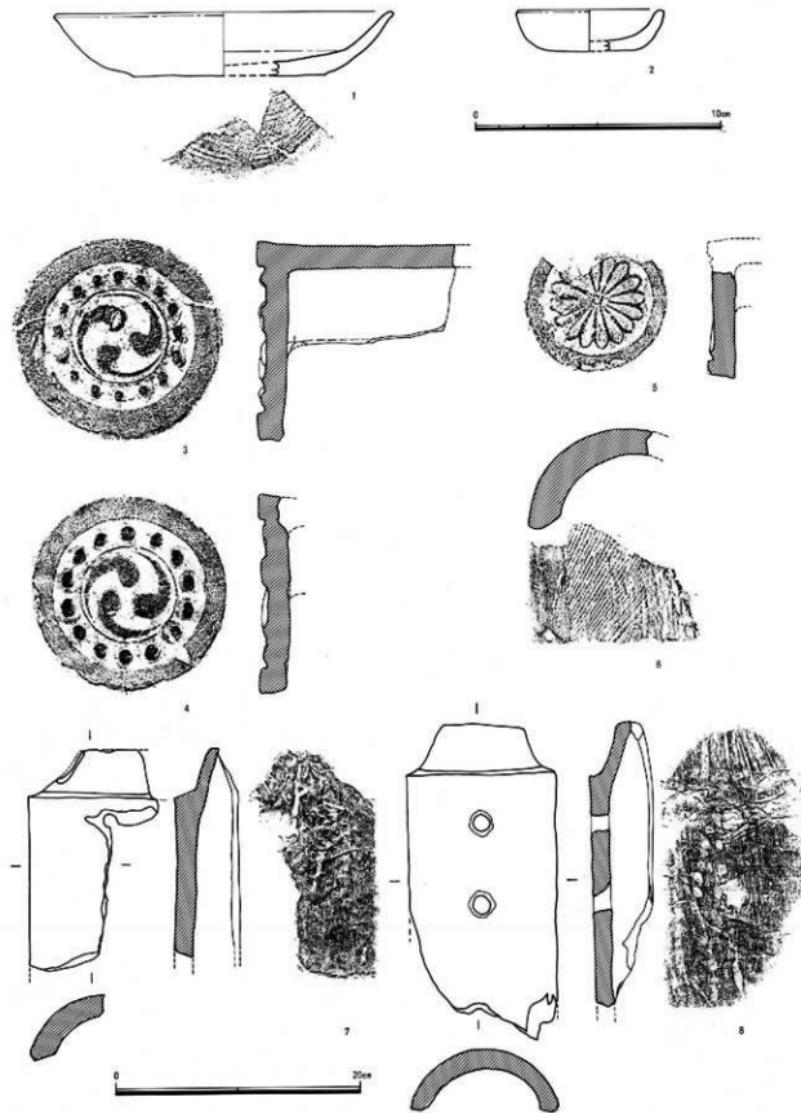


Fig.21 延岡城第11次（本丸長屋跡）出土遺物実測図

8. 雨下遺跡

所在地 延岡市天下町745-1外
調査原因 市道改良工事に伴う宅地造成
調査期間 970205~970214、970225~970227

調査面積 39m²
担当者 山田、高浦
処置 調査後破壊

(1)位置と環境

当遺跡は、五ヶ瀬川が大瀬川と分岐し、北へ大きく湾曲した部分に張り出した舌状の丘陵上に位置する。標高は約25mを測る。この丘陵には国指定南方古墳群第1号～9号（前方後円墳2基、円墳7基）が立地している。また、当遺跡の北の丘陵には第10号墳が立地している。調査地は埋蔵文化財公蔵地として取り扱われている。



Fig.22 雨下遺跡位置図 (1/15,000)

(2)調査の概要

調査地は、国指定第5号墳の隣接地である。5号墳は、前方後円墳として指定されており、未調査の古墳である。現在は盛土のほとんどが失われており、その規模等を確認することはできない。調査地は、1号墳、10号墳の立地状況から5号墳の前方部付近と考えられた。

今回の発掘調査は土層観察、周溝の検出に主眼をおいた。また、5号墳の現況測量も行った。

開発予定丘陵の東側は、後世の開発によりかなりの削平を受けている。トレンチは丘陵上に5箇所、丘陵下の畑地に1箇所設定した。



PL.10 雨下遺跡調査前風景

(3)検出遺構

遺構は検出されず、5号墳の墳形を確認する資料は得られなかった。

(4)出土遺物

縄文土器片19点、刀子1点、陶磁器片9点が出土したが、いずれも耕作土中であり、包含層の確認はできなかった。

1は縄文土器の深鉢で、口縁部下に三角突帯をもつ。色調は茶褐色で、胎土、焼成とも良好である。内面はナデ調整である。

2は刀子で、現存長9.5cm、重量27.5gを測り、関に向かいほぼ水平を保つ。



PL.11 雨下遺跡調査風景

(5)まとめ

現況測量図、トレンチによる土層観察から、5号墳の規模および前方部の位置を確認することはでき

なかった。現存丘陵が掘削されることは非常に残念であり、南方古墳群第1号～10号の立地する丘陵の保存について早急な対策を考えなければならない。

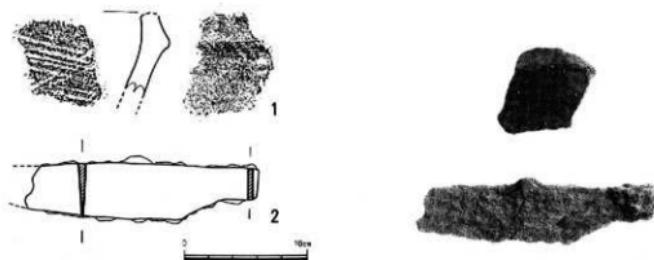


Fig.23 雨下遺跡出土遺物実測図 (1/2)

PL.12 雨下遺跡出土遺物

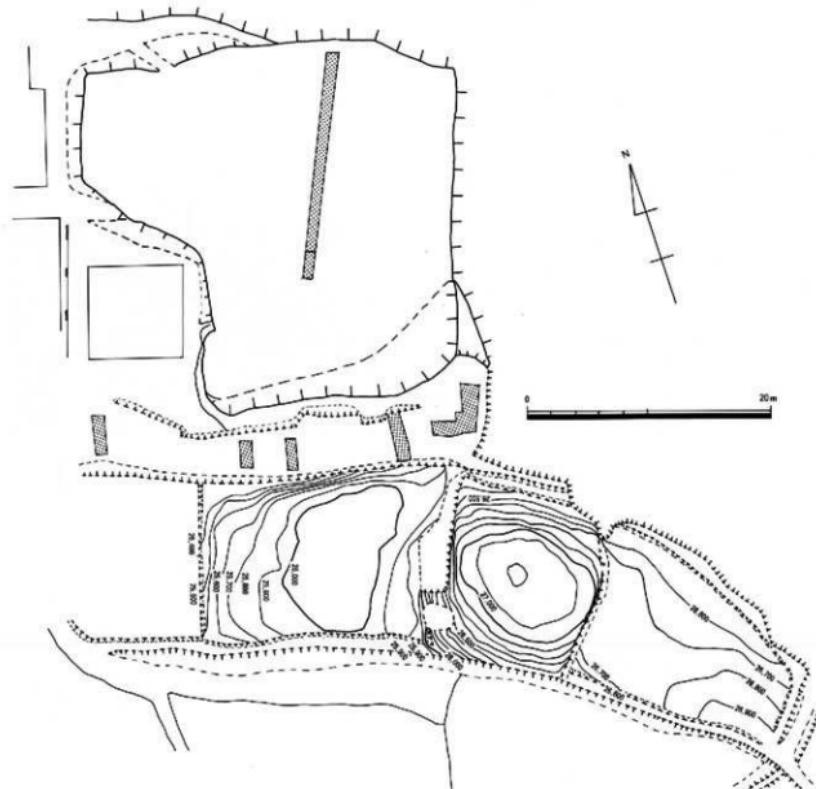


Fig.24 雨下遺跡調査区配置図 および 5号墳現況測量図 (1/400)

9. 千光寺山門

所在地 延岡市祝子町3059番地
調査原因 山門改築
調査期間 970123

調査面積 8 m²
担当者 山田
処置 一部保存

(1)位置と環境

千光寺は、市街地の北部を東流する祝子川の北岸に位置する。宗派は曹洞宗で、天保九年(1838)に記された「山緒書」によると、創建年代は天平九年(737)とされている。本寺は、江戸時代後期(1837)にいわゆる大塙の乱を起こした元大坂町奉行与力大塙平八郎の娘とされる関月尼が嫁いだ場所で、現在でも参拝者が絶えないといふ。本寺は、本堂が鉄筋コンクリート構造物になっており、山門のみが木造建造物として残っている。この山門は、今山八幡宮周辺(山下町)に存在していた善龍寺が、明治初年の神仏分離令に伴う廃寺のため山門をこの寺に移設したとされ、市内に現存する最古級の山門として知られている。



Fig.25 千光寺山門位置図 (1/15,000)

(2)調査の概要

今回の調査は、山門改築に伴うもので、記録保存の観点から、建造物について正確な測量等を行う必要があった。このため、日向市の美ヶ津町伝統的建造物群等の調査で実績がある宮崎県立日向工業高等学校建築科に依頼するとともに、市教育委員会は写真撮影及び山門の移転時に撤去された瓦の調査等を中心にして実施することとした。調査の結果、軒瓦類が3種類確認された他、二枚の鬼瓦の一方から年号などの記載が確認された。また、門の柱などから墨書が確認された。



PL.13 千光寺旧山門

(3)検出遺構

なし

(4)出土遺物

鬼瓦1は菊紋の瓦で、花弁は16枚みられる。この瓦には、製作年代及び制作者の銘が刻まれている。
表左側面「文化八年」、同右側面「參月中旬」、同上

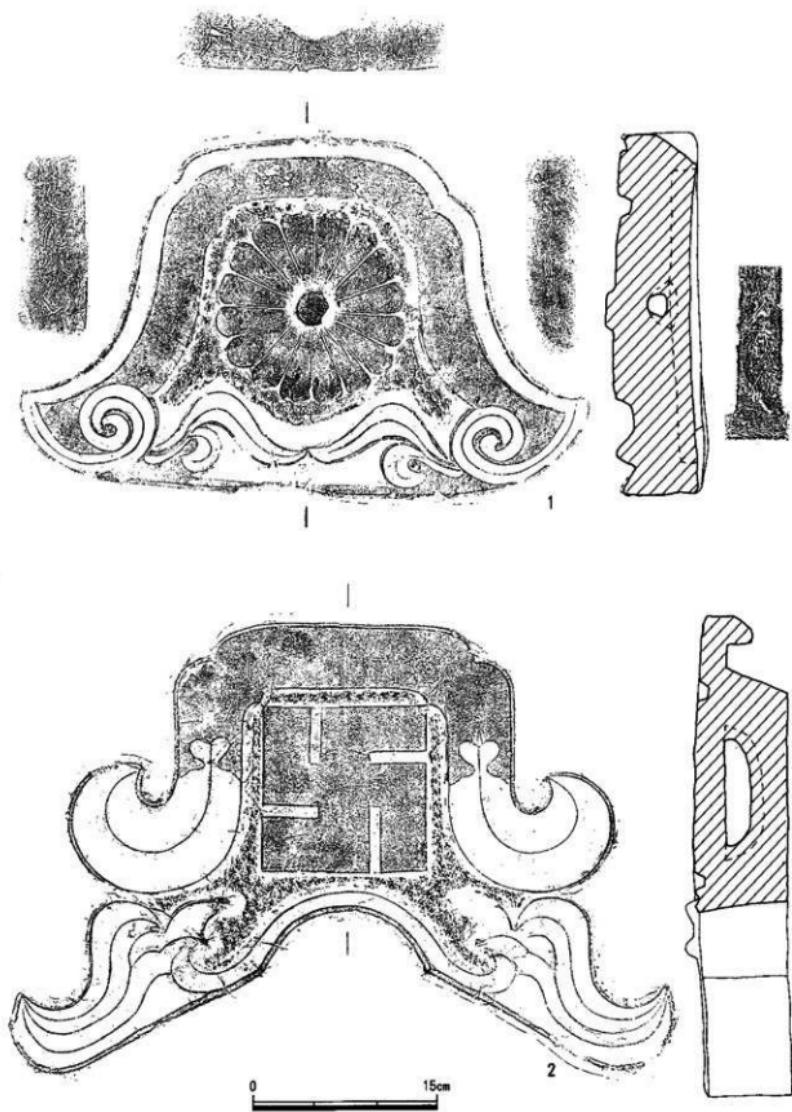


Fig.26 千光寺山門鬼瓦拓影実測図 (1/4)

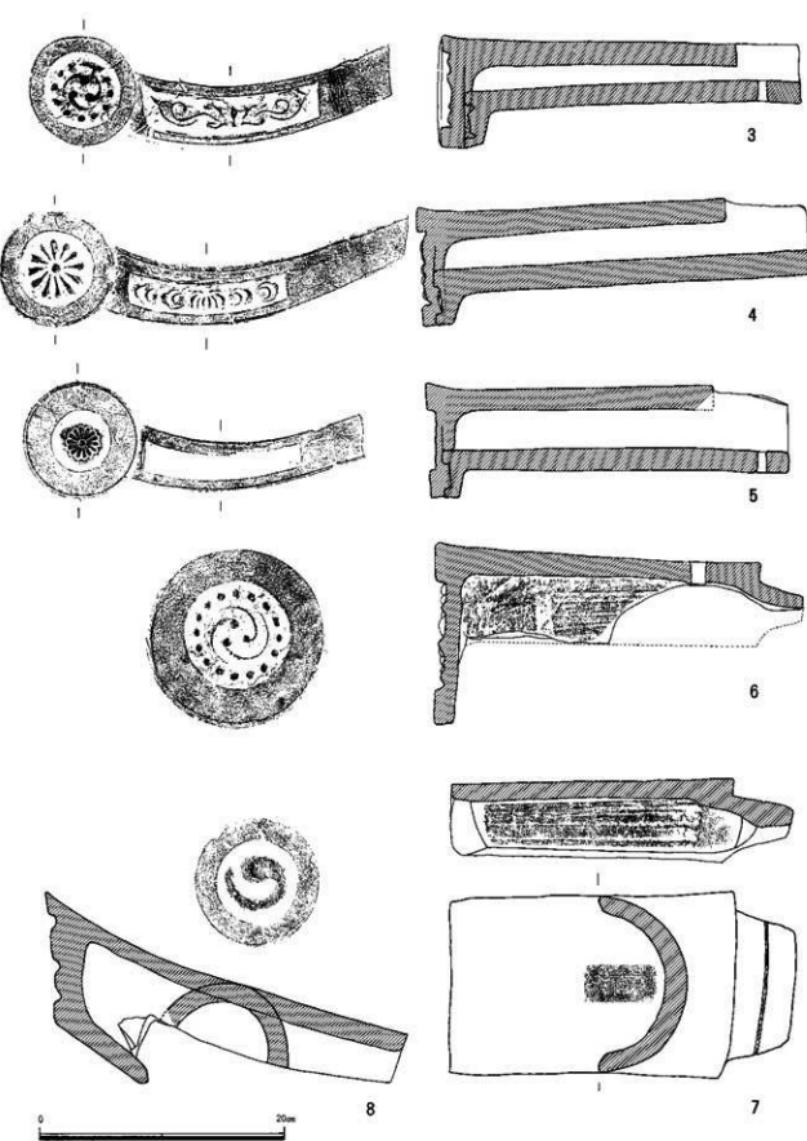


Fig.27 千光寺山門瓦実測図 (1/4)

面「当地か王ら節 細工」、裏面「才藏作」とあり、この時期に瓦の取り替え工事が行われていたことを示している。鬼瓦2は右まんじ紋の瓦で、刻印等はみられない。軒平丸瓦は3種類確認され、3は瓦当に「宮下新右衛門」の刻印が見られる。

7は丸瓦で、表面に「吉岡新右衛門」の刻印がみられる。8は隅巴瓦である。

この他、部材の肘木からは、「實臂木西側南端」「東の妻實臂木南端」など設置場所を記したもののが確認され、出三斗組からは、「文政十三年（1830）寅六月 棟梁八矢榮右衛門 行年七十七才作之」との記載がみられた。この八矢榮右衛門について、文献調査の結果、市内野地町在住で代々大工の家系だった八矢家があり、その過去帳から榮右衛門の名前が確認（天保九年没）され、山門改修に参加した大工の一人として、その存在について文献と一致して初めて明らかになった。

（5）ま と め

今回の調査では、山門の建築年代及び善龍寺跡にあったとされるデータは得られなかった。しかし、部材に記された墨書によって修理年代や大工の名前等が確認され、内藤家文書等の文献調査の手掛かりになることが期待される。また、山門改修にあたり、旧山門の復原の手法で行われるとともに、出三斗組など、建築材の一部保存が行われたことは地域の歴史文化を後世に伝承するうえでも意義深いものである。



PL.14 千光寺山門改築後（南側から）



PL.15 千光寺山門改築後（北側から）



PL.16 千光寺山門改築後（西側から）



1



2



3



4



5

- 1 鬼瓦
- 2 鬼瓦
- 3 軒平丸瓦
- 4 軒平丸瓦
- 5 軒平丸瓦

PL.17 千光寺山門検出瓦

宮崎県延岡市

千光寺山門調査報告書

宮崎県立日向工業高等学校建築科

1996. 11

目 次

本文目次

第1章 調査の概要	25
1. 調査の目的	
2. 調査の組織	
3. 調査の経過	
4. 調査内容	
第2章 千光寺山門の概要	27
1. 千光寺山門の位置及び敷地	
2. 山門の規模	
3. 山門の構造形式	
第3章 千光寺山門の特徴	28
1. 平面構成	
2. 立面構成	
①南側立面	
②西側立面	
3. 構造形式	
4. 意匠的特色	
①唐破風	
②虹梁	
③木鼻	
④棊股	
⑤出三斗組	
⑥金具	
⑦兎毛通	
5. 木割りについて	
①柱真々間隔を基準としたもの	
②柱幅を基準としたもの	
第4章 千光寺山門の建築年代	30
第5章 文化財としての重要性	30

挿図目次

Fig. 1 千光寺建物配置図
Fig. 2 千光寺山門平面図
Fig. 3 千光寺山門南側立面図
Fig. 4 千光寺山門西側立面図
Fig. 5 千光寺山門桁行断面詳細図
Fig. 6 千光寺山門梁行断面詳細図
Fig. 7 千光寺山門平側虹梁詳細図
Fig. 8 千光寺山門妻側虹梁詳細図
Fig. 9 千光寺山門金具詳細図
Fig. 10 千光寺山門出三斗組詳細図
Fig. 11 千光寺山門兎毛通（唐破風懸魚）詳細図
Fig. 12 千光寺山門柱傾斜図

第1章 調査の概要

1. 調査の目的

千光寺は、曹洞宗の禅寺として、天平9年（737）に創建されたと言われている。境内には、山門、本堂、観音堂があり、本堂及び観音堂は新しく立て替えられている。

唯一、木造の山門のみが江戸時代に建造されたものであり、これは明治期に今山の善龍寺（真言宗）より移築されたと言われている。善龍寺は、真言宗の寺として、養老元年（717）に創建されたと言われ、延岡で最も古い寺の一つと考えられている。明治期に入り、廢仏毀釈の運動が高まり、延岡藩でも明治3年から翌年にかけて合寺や廃寺が行われ、善龍寺もこの対象となった。この頃に山門が千光寺に移築され、仁王像2体が大武寺（大武町）に移されたものと考えられているが、現段階においてそれを裏付ける史料は確認されていない。

今回の調査は、山門に対する速急な保存対策の必要性から、保存計画の策定のため必要な資料を作成することを目的としたものである。

2. 調査の組織

調査は、延岡市教育委員会より依頼をうけた宮崎県立日向工業高等学校建築科を中心となり実施した。

調査員 橋口昭彦 日向工業高等学校建築科

倉岡 正 " "

稲用光治 " "

北ノ園俊一郎 " "

平島昇 " "

樺木野広道 日向工業高等学校建築科

調査補助員 伊藤基
日向工業高等学校建築科3年

櫻野望

日向工業高等学校建築科2年

小邑政隆

日向工業高等学校建築科2年

椎屋奈美子

日向工業高等学校建築科2年

六角繪美

日向工業高等学校建築科2年

甲斐智

日向工業高等学校建築科1年

甲斐政広

日向工業高等学校建築科1年

黒木寿光

日向工業高等学校建築科1年

濱崎三開

日向工業高等学校建築科1年

江藤了

日向工業高等学校建築科1年

藤本健一

日向工業高等学校建築科1年

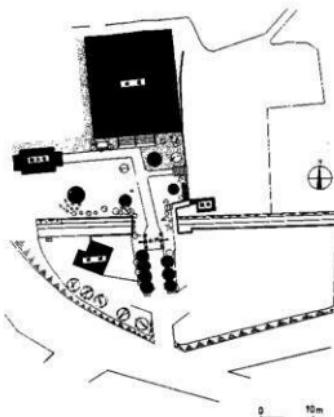


Fig. 1 千光寺建物配置図 (1/800)

3. 調査の経過

平成8年7月17日に延岡市教育委員会の依頼を受け、10月下旬までは、保存計画の策定のための調査であるとともに口向工業高等学校建築科の生徒の教育活動の一環として調査を実施した。委託前に予備調査、委託後は本調査・補助調査に分けて行った。以上の現地調査に加え、そこで収集した資料を整理し、図面化、図表化し、さらに報告書の作成を行った。

【予備調査】

平成8年6月15日 山門についての聞き取り調査
写真撮影

【本調査】

平成8年7月31日 虹梁・木鼻・斗きょう等の資料採取
配置実測調査
山門の立面実測調査
各部写真撮影

平成8年8月1日 虹梁・木鼻・斗きょう等の資料採取
虹梁・木鼻・斗きょう等の実測調査
配置実測調査
山門の立面実測調査
梁行唐破風屋根の詳細実測調査
桁行屋根の詳細実測調査
各部写真撮影

平成8年8月2日 虹梁・木鼻・斗等の実測調査
配置実測調査
小屋組実測調査
梁行唐破風屋根の詳細実測調査
桁行屋根の詳細実測調査
各部写真撮影

【補助調査】

平成8年10月11日 補足調査、詳細等の実測もれ調査
写真撮影

平成8年10月17日 補足調査、詳細等の実測もれ調査
写真撮影

4. 調査内容

調査内容は、千光寺の敷地内にある山門の実測調査を主とし、歴史的背景の調査も行った。実測調査は、現状を把握するために配置（平板測量、レベル測量、光波測量による）実測、平面実測、立面実測、断面実測、屋根形式、虹梁・木鼻・墓殿・手挟・懸魚・斗きょう等の装飾の実測調査を行い、図面作成上の補助として写真撮影、ビデオ撮影も行った。

第2章 千光寺山門の概要

1. 千光寺山門の位置及び敷地 (Fig. 1)

千光寺山門は、延岡駅より4km程西に行った祝子川中流の祝子町に位置している。敷地は、県道岩戸延岡線と平行に祝子川をはさんだ道路に面しており、南に日本屈指の清流として名高い祝子川を北西に大分県境の大崩山系の山々を望むことができる。

山門は、道路の路肩より23mの所にあり、その奥に本堂、西側に観音堂を配しており、ほぼ真南に正面を向けて建てられている。

山門の所有者及び所在地は、下記の通りである。

所有者 千光寺
所在地 延岡市祝子3059番地

2. 山門の規模

建物の主要寸法は、下記の通りである。

(表-1) 建物の主要寸法

区分	摘要	寸法
桁 行	桁行両端柱間真々	3.050 m
梁 行	梁行両端柱間真々	2.520 m
軒 高	柱礎石下端より軒桁(平側虹梁)上端まで	3.270 m
建 高	柱礎石下端より鬼瓦上端まで	4.630 m
建築面積	柱中心間の水平投影面積による	7.686 m ²

3. 山門の構造形式

山門の構造形式は、下記の通りである。

(表-2) 構造形式

区分	構 造 形 式	参 照 図
平 面	平入り 10尺×8尺3寸(四脚門) 2本の木柱の前後に4本の袖柱	Fig-2
基 础	明治期に移築されたためか、礎石なし コンクリート製の基礎となっている	Fig-3 Fig-4
軸 組	2本の木柱の前後に4本の袖柱 木柱間に冠木を渡し、柱上に女架をつけ、出三斗を組む	Fig-4 Fig-5 Fig-6
小 屋 組	棟木を2段(野棟、棟木) 垂木を3段(野垂木、地垂木、飛えん垂木)	Fig-5 Fig-6
屋 根	平側一切妻屋根 妻側一唐破風屋根	Fig-3 Fig-4

第3章 千光寺山門の特徴

1. 平面構成 (Fig. 2)

この山門は、ほぼ真南に面して建ち、梁間方向に真々8尺3寸、桁行方向に真々10尺の矩形の平面を持ち、建築面積2.33坪となっている。

中央に2本の方角の本柱を配し、その前後に4本の方角の袖柱を配した四脚門の形式となっている。本来、四脚門の形式は、2本の円形本柱（袖柱により太い）と、その前後の4本の方角の袖柱から成り立っているが、この山門は、6本すべて同寸の方角の柱になされている。

一方、山門の正面左側には通用門を配し、正面右側を袖壁としている。

2. 立面構成

①南側立面 (Fig. 3)

南側（平側）の立面構成は、左右対称とし、基礎下端から柱上部の出三斗組までの高さと屋根の高さがほぼ2対1の比例関係になっている。

2本の袖柱は、平側虹梁により繋がれその虹梁の中央部には、墓股がのっている。また、柱上部の前面（平側面）及び妻側面には、木鼻を配し、その上に禅宗様に見られる台輪を、更にその上に妻側虹梁を支えるための出三斗組を配している。一方、柱には、面取りが施されており、柱幅と見付との比が10対1になっている。柱の腰長押から下には、柱を補強するための板が巻いてある。

門扉は、蝶番により支えられている。また、鏡板は、樺の一枚板とし飾り鉢にて固定されている。

②西側立面 (Fig. 4)

西側（妻側）の立面構成は、左右対称とし、3本の柱上部にそれぞれ出三斗組を配し、妻側虹梁を支えている。虹梁の上部には、雲を想わせるレリーフ状の装飾が施され、また、屋根に唐破風を利用することにより山門の風格と威厳を示している。唐破風の軒の出を袖柱芯から破風尻まで計ると、柱真々間の分だけ出ていることが分かる。

一方、唐破風の中央には、山門の横に保管してある兎毛通（唐破風懸魚）が取り付けられていた痕跡が残っている。また、柱相互には、格子戸（蔀戸）が配されており、当時として仁王像が格子越しに見えるような形式だったとも考えられる。

3. 構造形式 (Fig. 5・6)

妻側中央の本柱には冠木を渡し、柱上に女栱をつけ出三斗を組んでおり、平側から見ると、冠木上部に出三斗を組み、栱を支えている。本柱と袖柱は、上部を女栱で繋ぎ、それに中央部（窓下）を長押で挟むことにより、柱の振れ止めの役目をしている。小屋組は、棟木が2段に構成され、上の棟木（野棟）に野垂木がかかり、下の棟木に地垂木がかかっている。また、平側の軒先は、2軒となっており、上段が飛えん垂木に下段が地垂木となっている。一方妻側の唐破風屋根の軒裏は、上段が野垂木で下段が輪垂木となっている。

門の扉は、方立と取り付け金具（入八双金具）によって取り付けられており、金具は半分程当初の形を残しているが、扉の痛みが激しいため蝶番の役目を果たしていない。また、扉下の蹴放しの痕跡が本柱に残されているので、もとはついていたと思われる。

4. 意匠的特色

①唐破風 (Fig. 4)

この山門の屋根形式を見ると、平側が切妻、妻側が唐破風になっている。本来、唐破風は、ファサード正面に使用されることが多く、正面でない妻側に使用されていることは、極めて特異な存在と思われる。規模は、破風見付幅8尺3寸、奥行4尺5寸である。勾配は、4寸に近い値となっている。

一方、唐破風の茨（破風の突出した部分）の位置は、袖柱中心間を5分割した内の左右より5分の1の位置の所に配されている。

②虹梁（Fig. 7・8）

虹梁は、平側の柱上部と妻側の出三斗組の上部に配されている。虹梁の装飾は、若葉でいわゆる「鰐鮎式」の唐草であり、この形式は江戸時代に見られるものである。峠も平側の虹梁には、本眉、欠眉、捨眉がついている。

③木鼻（Fig. 7）

木鼻は、鳥のくちばしに似た入り込みのある輪郭で唐草の彫刻が深くはっきり分かるように施されている。木鼻の配されている所は、4本の袖柱の上部に2個ずつと2本の本柱の出三斗組の中に2個ずつ配されている。この輪郭は、桃山時代から江戸時代にかけて見られるものである。

④墓股（Fig. 7）

墓股は、荷重を受けるという力学上のこともあって、だいたい山形になっている。墓股には、この山形が板のように全部詰まっている板墓股と、中が透けている本墓股がある。この山門の墓股は本墓股であり、唐草の彫刻ばかりで出来たものである。

⑤出三斗組（Fig. 5・7・8・10）

柱頂にも大斗の上で2個の肘木が縦横に交差し、その上に4個の巻斗と1個の方斗とを置いたものを出三斗組という。この形式の出三斗組が柱上部6か所に見られる。また、本柱相互の中央には、上記の形式の大斗の下に皿斗を用い、その皿斗を台輪によって支えている。

⑥金具（Fig. 9）

建築当初のものと思われる金具が2種類残っている。1・2は、扉に用いられているもので、一端が魚の尾状に入り込んで二又になった入八双金具である。3・4は腰長押と方立に用いられた箱金具である。

⑦兎毛通（唐破風懸魚 Fig.11）

兎毛通は山門の横に2個保管しており、建築当初は妻側の唐破風中央に取り付けられていたものである。かなり、風触が進んでおり、模様がはっきりしない部分もあったが、山門に使用されている唐草模様及び寺社建築資料により、(Fig.11) のようになっていったと思われる。

5. 木割りについて

木割りには、我が国の伝統的な建築において、各部の比例と大きさを決定するシステムである。この山門にも木割りが取り入れられていると思われる所以でふれてみたい。

①柱真々間隔を基準としたもの（Fig. 4）

妻側（西側）において、袖柱芯から軒の出（唐破風尻）までの距離を本柱と袖柱の真々間隔の分だけとっている。つまり妻側立面は、縦に4分割されており、4分の1ずつが軒の出になっていることが分かる。

一方、唐破風の茨の位置は、袖柱と袖柱の真々間隔を5分割することにより、袖柱芯から5分の1の位置に茨が配されていることが分かる。

②柱幅を基準としたもの (Fig. 3・7)

出三斗の大斗の幅は、柱幅と同じにしており、柱幅を5分割して5分の3を斗尻の寸法としている。また、方斗と卷斗の幅は、柱幅の5分の3になっている。飛えん重木間隔は、卷斗と方斗の真々間距離になっている。

以上のことから、山門の大まかな寸法は柱間を基準にし、細部については柱幅を基準に木割りが定めていると考えられる。

第4章 千光寺山門の建築年代

今回の調査において、山門の建築年代をはっきり知るうえでの資料（棟札、木札等）は、発見できなかった。ただし、小屋組の棟木を支える束に墨書きを見ることができたが、記述内容については、建築年代なのか山門に関する記録なのかはっきりしない。赤外線カメラによる撮影して、墨書きの解読が必要である。

資料以外で建築年代を推察する手掛かりとして、山門の構造形式から装飾の細部に至るまでの詳細な調査がある。この山門については、柱の面取り幅及び装飾等（木鼻・虹梁の模様及び彫刻の彫りの深さ等）から、江戸時代前期から中期のものと推察される。また、善龍寺に山門と一緒にあった仁王像（現在、延岡市内の大武寺にある）が寛文8年（1668）の作品と判明したことからも江戸時代の前期から中期頃に建てられたものかもしれない。

現段階で建築年代を特定することには、資料が不足しているため、今後更に調査が必要である。

第5章 文化財としての重要性

有形文化財として残すためには、建物の由来、建築年代、建物の構造の改造（保存状態）が少なく建築当初の様式が何えるものかどうか等があげられる。

①建物の由来

延岡で最も古い今山の善龍寺の山門であったことや明治期の廃仏毀釈によって合寺・廃寺となったお寺の資料がほとんど残っていないことを考えると、山門だけでも保存されることは重要である。

②建築年代

現時点では明確にされないが、墨書きの早期解読と古文書等からの調査が今後必要とされる。

③建物の保存状態

瓦の一部取り替え、袖柱の補強、部材の一部取り替え等が見受けられるが、全体的に建築当初の形を残していると思われる。建築様式的には、禅宗様の流れをくんでおり、木鼻・虹梁・幕板等の装飾も完全な形で残されている。また、門扉の金物も当初のものが半分ほど残されている。

ただし、袖柱下部を補強していることからも分かるように袖柱の風蝕はかなり進んでいると思われる。(Fig.12) の柱傾斜図をみると、建物全体が北東側に傾斜していることが分かる。

以上のことから、老朽化が進んでいるものの、山門を文化財として残す価値は高いと考えられ、有形文化財としての位置付けを行うなどの保存対策が望まれる。しかし、現状での保存の可能性が困難であるとのことから、復原及び重要部材の保存などの検討が必要である。

社寺建築用語一覧

1. 虹梁	こうりょう	20. 部戸	しどみど
2. 木鼻	きばな	21. 入八双金具	いりはっそうかなぐ
3. 墓股	かえるまた	22. 本眉	ほんまゆ
4. 山三斗組	でみつどくみ	23. 欠眉	かきまゆ
5. 板墓股	いたかえるまた	24. 捨眉	すてまゆ
6. 本墓股	ほんかえるまた	25. 唐草	からくさ
7. 懸魚	げぎょ	26. 手挾	てばさみ
8. 兔毛通	うのけどうし	27. 女栄	めぱり
9. 唐破風	からはふう	28. 肘木	ひじき
10. 冠木	かんぎ	29. 大斗	だいと
11. 柚柱	そではしら	30. 盒斗	さらと
12. 袖壁	そでかべ	31. 卷斗	まきと
13. 野棟	のむね	32. 方斗	ほうと
14. 野垂木	のだるき	33. 台輪	だいわ
15. 地垂木	じだるき	34. 方立	ほうだて
16. 飛えん垂木	ひえんだるき	35. 置放し	けはなし
17. 四脚門	しきゃくもん	36. 蟠番	ちょうつがい
18. 腰長押	こしなげし	37. 破風尻	はふうじり
19. 鏡板	かがみいた	38. 苔	いばら

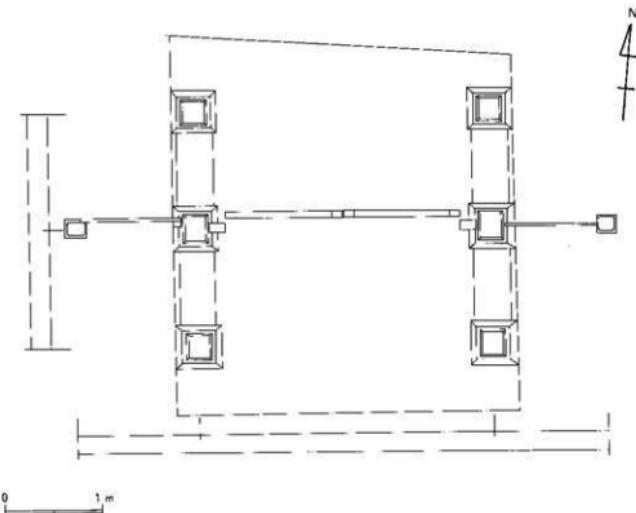


Fig. 2 千光寺山門平面図 (1/300)

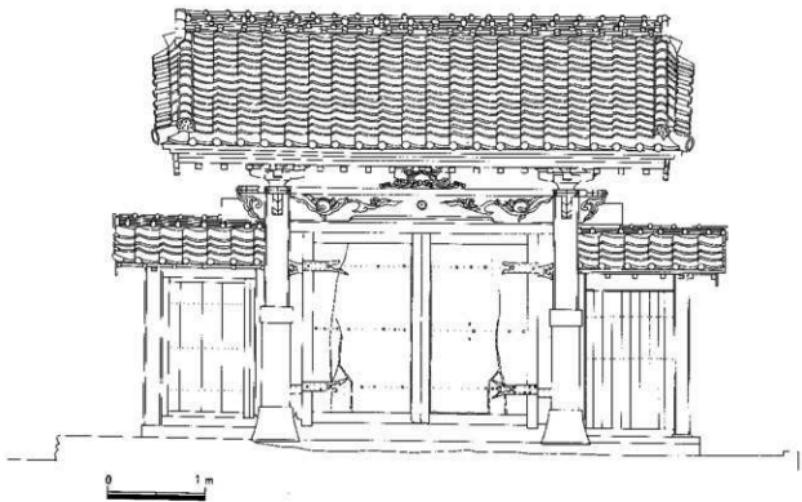


Fig. 3 千光寺山門南側立面図 (1/50)

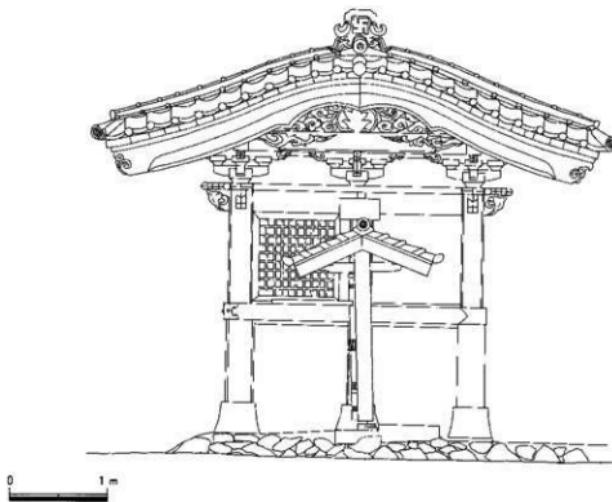


Fig. 4 千光寺山門西側立面図 (1/50)

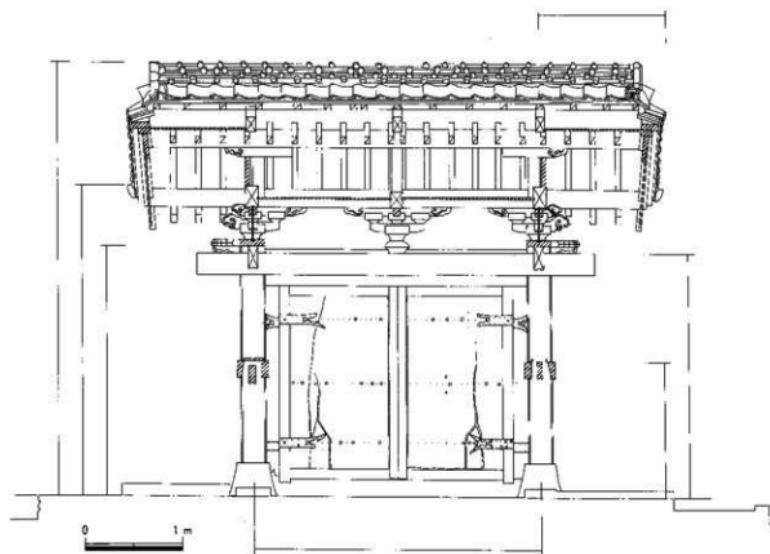


Fig. 5 千光寺山門桁行断面詳細図 (1/50)

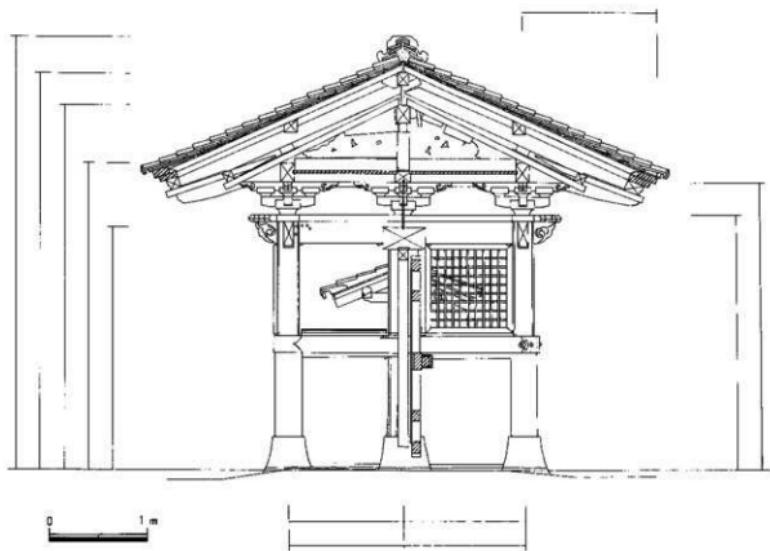


Fig. 6 千光寺山門梁行断面詳細図 (1/50)

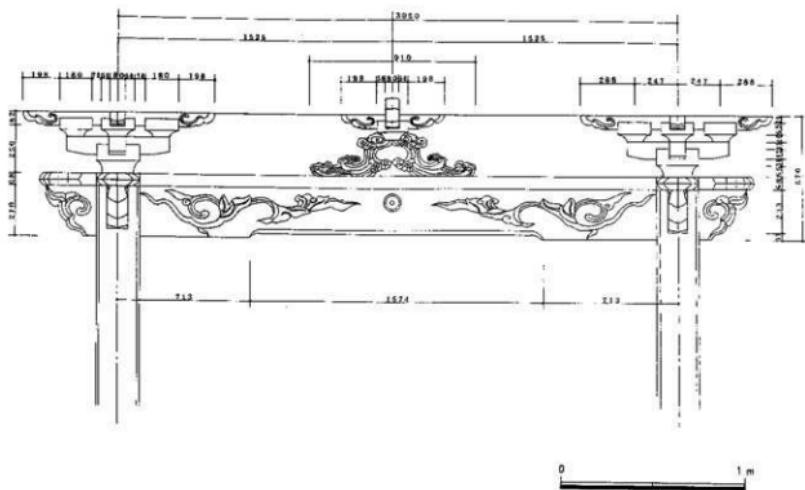


Fig. 7 千光寺山門平側虹梁詳細図

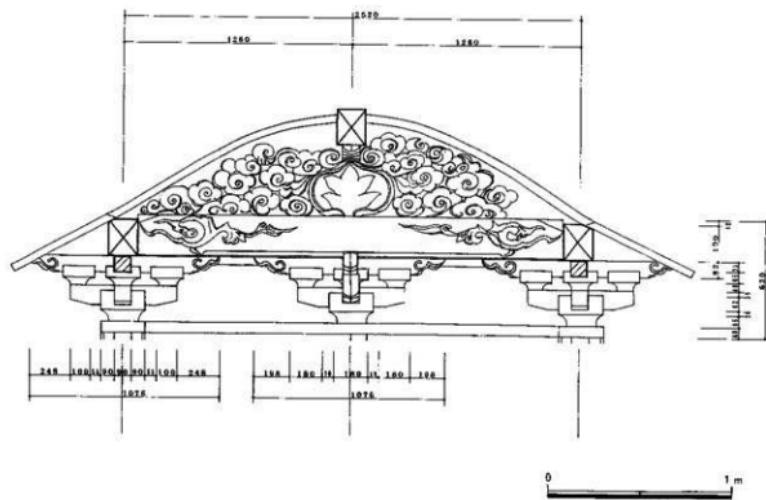
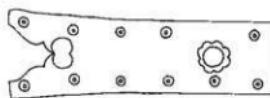
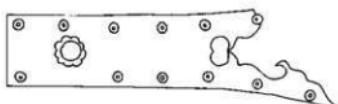


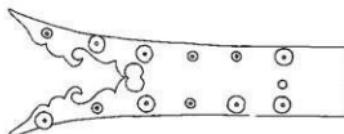
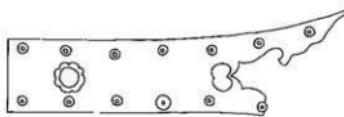
Fig. 8 千光寺山門妻側虹梁詳細図

上 段



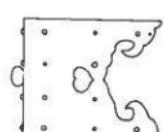
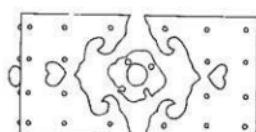
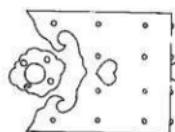
1

下 段



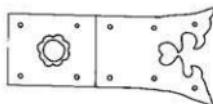
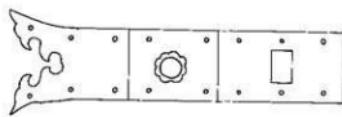
2

入八双金具（扉使用）



3

箱金具（扉長押使用）



4

箱金具（方位使用）



Fig. 9 千光寺山門金具詳細図 (1/70)

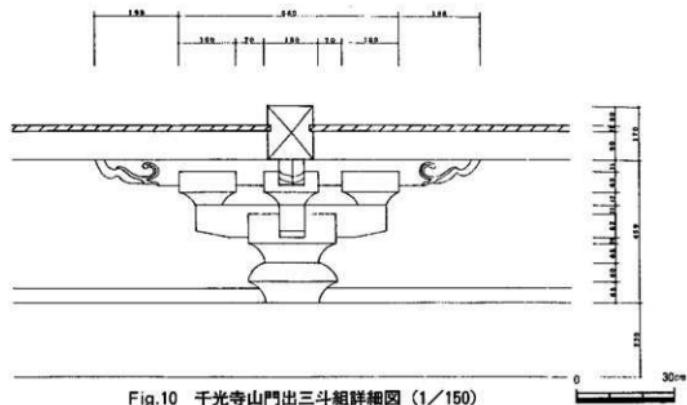


Fig.10 千光寺山門出三斗組詳細図 (1/150)

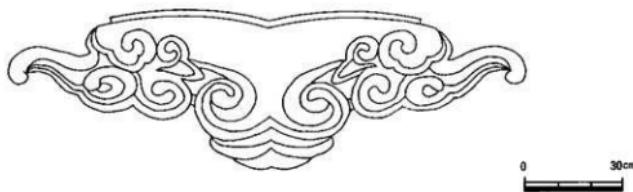


Fig.11 千光寺山門兔毛透（唐破風懸魚）詳細図 (1/150)

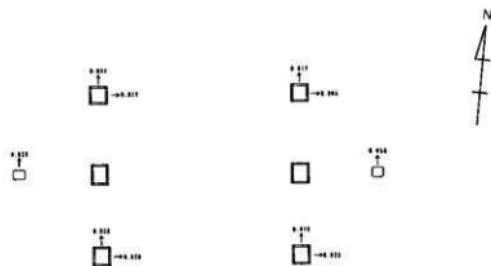


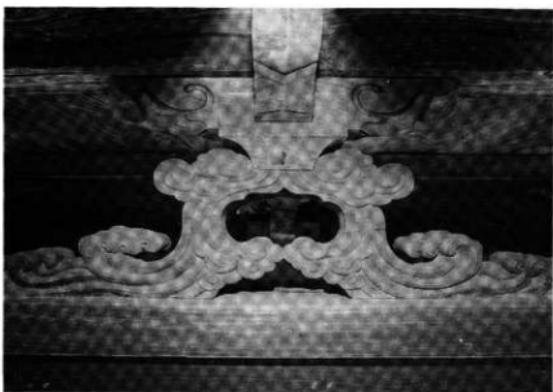
Fig.12 千光寺山門柱傾斜図 (単位: 寸)



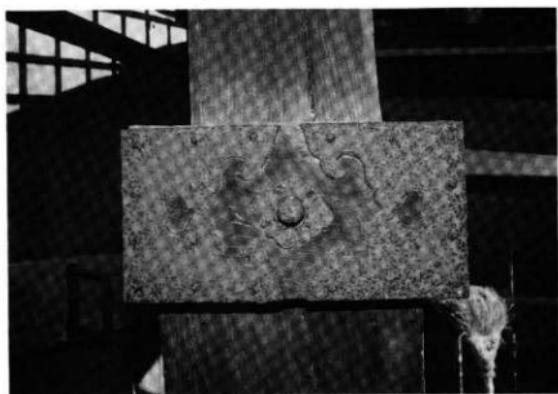
柱上部の木組



出三斗組



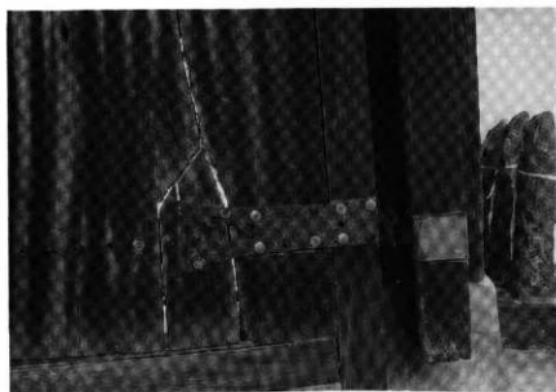
棊 段



箱金具（北側から）



箱金具（西側から）



入八双金具

報告書抄録

ふりがな	まいの うえのぼう のべおかじょう ひらの ふないわ のべおかじょう ひのぼり あもり せんこうじ
書名	今井野遺跡群 上ノ坊遺跡 延岡城第12次 平野遺跡 船岩遺跡 延岡城第11次 肥豊遺跡 雨下遺跡 千光寺山門
副書名	平成8年度市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	延岡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第17集
著者名	山田 雄、尾方義一、高浦 哲
編集機関	延岡市教育委員会
所在地	宮崎県延岡市東本小路2-1
発行年月日	1997年3月31日

所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
今井野遺跡群 (第3次)	延岡市大下町 字今井野	452033	4041外	32° 34' 02"	131° 37' 33"	1996.0701 - 1996.0709	2.8 m²	市道改良工事
種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項	
散布地	先土器	無			無			
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
上ノ坊遺跡 (第3次)	延岡市富美山町 字上ノ坊	452033	3006	32° 35' 28"	131° 40' 06"	1996.0715 - 1996.0723	4.8 m²	民間宅地造成
種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項	
散布地	古墳	無			無			
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
延岡城第12次 (西ノ丸東虎口)	延岡市天神小路 字本小路	452033	3018	32° 34' 42"	131° 39' 42"	1996.1009 - 1996.1030	3.4 m²	道路・駐輪場整備
種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項	
城郭	近世	排水施設、石垣跡			弥生土器、陶磁器			
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
平野遺跡 (第2次)	延岡市野出町 字平野	452033		32° 34' 09"	131° 38' 32"	1996.1224 - 1997.0109	5.8 m²	民間宅地造成
種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項	
散布地	中世	無			無			
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
船岩遺跡	延岡市大下町 字船岩	452033	4055	32° 34' 01"	131° 37' 40"	1996.1101 - 1997.0114	41.2 m²	市道改良工事
種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項	
散布地	先土器 縄文	無			無			

所収遺跡名	所在地	市町村コード	道路コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
延岡城第11次 (本丸・長屋跡)	延岡市東本小路 字本小路	452033	3018	32° 3' 39"	131° 01' 55"	1997.0110 1997.0205	110 m ²	都市公園整備 (トイレ新築)
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
城郭	近世	排水施設、柱穴		瓦、陶磁器				
所収遺跡名	所在地	市町村コード	道路コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
肥登遺跡	延岡市野地町 字肥登	452033	4084	32° 34' 24"	131° 38' 58"	1997.0116 1997.0129	58 m ²	民間宅地造成
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
散布地	古墳	無		陶磁器				
所収遺跡名	所在地	市町村コード	道路コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
南下遺跡	延岡市天下町 字南下	452033	4056	32° 34' 09"	131° 38' 02"	1997.0205 1997.0227	39 m ²	市道改良工事に 伴う宅地造成
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
古墳	古墳	無		縄文土器、刀子 陶磁器		国史跡隣接地		
所収遺跡名	所在地	市町村コード	道路コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
千光寺山門	延岡市段子町 字池ノ上	452033	2024	32° 36' 06"	131° 39' 31"	1997.0123	8 m ²	山門改築
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
寺院	近世	無		鬼瓦		建築部材を一部保存		

平成8年度 市内遺跡発掘調査事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1997年3月

編集・発行 延岡市教育委員会

〒882 宮崎県延岡市東本小路2-1

TEL 0982-22-7047

印 刷 吉田印刷株式会社

延岡市川原崎町441-1